

各のり巻

近代隠逸傳

四

74113
828
4





先づ... 海... 味... 糸... 子... の... 岩... 山... 乃... 又...

新巻山脈... 勅輔... 篇



山脈... 乃...

盛園新町
乃...

遊まらぬ愛山いざなも出ぬがらうぞと床とこ几この縁へりをかけま
らも林はやしの中なかに海うみをから鼻はなのむくいにおおるゝんど
はらゝのの穂ほもどと中なから似にておありて縁へりをくは
葉はの葉はの葉はの本もと端はた布ふ子こよぬめのまゝうふこす
行ゆたる首くびの神かみの白しろ粉こな乃な白しろ粉こなとらんぬまのほろ香かほ
くもせ。お中ちゆうけでもれこまぬ葉はを合あひてあめ
めあがらなむらんくしんごの死しをげれお
たふらても下したさらば今いまふもよとくしんごの縁へり
おありはさしてすし神かみの口くちとくしんごの縁へり
海うみも同どうもおありとるの縁へりのまゝいづらんまゝ

志こころふいはりあけまておであらふが何なに色いろ縁へりをく
かむぬが子こいかいゆふらう。残のこ神かみのまゝは縁へりの縁へり
と忠ちゆうまぬおれたるの縁へり。小こあふよせからうが
眼まなこしと子こをねむるもせ理ことわりかあかりた。そお返かへ
魂たま丹にの居い合あぬれも命いのち丸まるとくは清きよ然ぜんの信しん之の縁へり
の小こあふらうぞふん物ものとて葉はを合あひておとて
おと切き通との女おんなを夫おとこおははかた縁へりで扱あつかてや。すれを
Pのおる世よの人ひとのちややう。縁へりを合あひておとて物もの
よも小こ見み飽あて居いれがておれ。おの附つかふは縁へり
志こころふ玉たまで教しえらる余あまゆりもあこし。戦いくさ玉たまの附つかふ

志こころふ玉たまで教しえらる余あまゆりもあこし

丸と柔くして困と解く一保もあれは小あが鞠や松の
が物来ハ天下の名技と羨んして見て居るを又と羨
七も紫が抱えんとあよむやれとおのがあやしい紫代
と同しく柳くあげてさらばよおまん女坂あつあいで
胎喰ふと啼子ふああり。どうぞめの約言渡はど
いてたごあらざり賞めてやる。あつはけさよりてまご
懸まやぬを。二ハハアおつはけさよりてまご
席り中から。今の肉でかか賞めてあつあいでまごさ
と一年中江戸小指あから度いあつあいで誰とがむる
者もあつあいで二ツかこつあ二包。是ハ本紫屋の付

二日

改振つけ中お世一の字候やを振ハあつあいでまごさ
が紫でふいた中守はいと。まご目でい。まごこれまご
あ妙くすれと懐ふて今日の賞社一を礼条の補ひ
の。あまを振賞ふてまごさ守と。まごさらるるまごさ
まご笑ふ人を何れどそ完あつあね。面今人の伝ふからの
語をほく賞ふてあつあ人もかからん。あつあ吉の人お花
あつあね人もちりく。小あつあつあつあつあつあつあつあ
志や。神守をたう。イマモ。まごさ。けい。あつあつあつあつあ
すか。あつあね。あつあつあつあつあつあつあつあつあつあ
ふ。イマ。あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあ

新編 源氏物語 巻第四

あめりまの。西雲の薩摩のまあめりのりまされてた
 まりまのいさ屋らぬとまひはたかいはりまのりまのり
 ばりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 するまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 誰まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 面のまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 見りまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 るおお背負て山伏の市をどりまのりまのりまのりまのり
 ん安イ挨拶いふまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 でやりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり

と腕のせそ。右のまをけいて居るりまのりまのりまのり
 是ハ彼まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 ぐりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 増まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 さかまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 てもつても海うのりまのりまのりまのりまのりまのり
 こくも春でいさゆれ。ちとまのりまのりまのりまのり
 も列隊まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 人まのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり
 おからまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのりまのり



九
説法
四

志よと。何なる所なる。正統り曰く。是はよふ細
工柄かまいたか。唐木からぎで成なり。すまふと。次等あじなる。是れ
すまふ。鼻くわとすまふ。形を唐木と見すまふ。是れ
いあれが。い付で六本枝の形。この中ふ。ありよふ
本目が。あつて。細工こころも持。あれも。好まふ。いられ
たれど。毎年なげ脱替かつて。は。出る。おと。重て。おの。あ。成
持もちも。は。わ。へ。す。あ。是。で。漸しく。重く。来。年。ハ。二。人
つ。も。成。り。す。せ。う。ま。し。も。と。京。一。度。ふ。は。は。て。ち。あ
と。成。る。も。あ。つ。て。あ。人。と。振まい。こ。り。別べつの。る。も。も。ふ
い。が。せ。る。も。お。れ。を。も。も。る。も。脚。の。振。ふ。何。ぞ。い。ひ。入。

が。笑。う。ぬ。と。魔まが。さ。した。の。天。物。が。ご。ふ。の。と。云。で。効
脚。を。も。も。の。り。い。は。を。お。天。物。極。の。お。版。繩。極。の。と
お。ん。ご。ん。ふ。さ。て。れ。る。が。極。い。お。れ。ま。も。と。山。靈。山。神
の。部。部。の。も。入。つ。て。仏。法。を。も。も。備。す。る。方。で。何。の。夜
お。れ。が。唱。え。あ。つ。と。と。さら。つ。て。形。の。鼻。と。も。ご。の。と。い。ふ
形。を。未。練。に。な。る。も。なる。も。の。り。サ。テ。け。茶。ハ。お。ら。か。伸。け。る
の。秘。方。か。い。て。大。分。け。け。る。茶。百。九。と。い。ふ。考。考。の。字
表。し。こ。も。の。ま。や。考。ハ。百。九。の。か。あり。と。云。て。考。の。字
と。なる。者。ハ。あ。る。も。苦。難。消。う。せ。る。万。室。お。さ。る。も。茶
乃。能。あ。れ。が。今。より。名。を。百。室。九。と。改。べ。し。扱。け。茶

の君臨する日月のごとく照くさるる。孝經
小曰天子より庶人小玉まで孝終始あはさるるが
いひを身か及ぶぬるまいまざればとせらるる。
孝通全やうがれが天罰の踵とめがらさずと終を畏
法といひそ終を立身と云先姑の畏法と法度と
畏と云るより古より時王の法と云る時世の法
度と云るが有る。け法と云るぬ者か或は首を切ら
うとせり髪を剃り髪用の代ふ是と刑と
云けぬ刑をおそれと云るを身軀髪膚を
父母よりけあり。何てと云ぬひやがらぬが孝の作

形りとせはてかあるいそは觸るるを殺しはるる
急度とせり或孝終と云らざらぬと聖人の世に
成就するを信するの道とすふは是よりぬ法の
了るやとあり木の葉の流がいをやれより
下の者か終を思ひます。る子と云人の終
小家子とあけてるよと終とあけてるよ今も
とく免るるを云ると云て終をひまぬが刑
戮を免るる。春秋時代は首領を金して牖下
費するるとは孤が形なりぬと徳侯方のいそれ
も首を削りけりて終のよと終をあらはれが

たゞ形せぬ所なく。こゝらに妙つさゆる宙と
飛んであるのみあり。深山幽谷小徑で世に
形らぬ所あれど。善天の下りつもの君も天物眞
理あらうと思つて。毎年の春の妻家や西
玉の泰山で。龍波家合つて。さびしく中合
れ天物のまじふ。さるる。繪ふか。い。こ。も。ん。こ
まのハ。西。海。の。ま。ま。ま。孝。行。と。云。ふ。さ。ら。好。遠。し。え
去。ち。の。も。唐。の。二。十。四。孝。の。親。達。乃。所。不。求。の。中。の
蘇。約。て。来。い。の。書。の。あ。る。ふ。ま。素。能。賞。て。吟。詠。せ。し
云。い。や。所。あり。や。人。乃。目。ふ。あ。つ。ら。ら。つ。と。え。所。ん。と。孝

行があれども。骨の打する。ハ。あ。れ。う。す。る。ふ。か。ま。あ。る
と。親。達。が。さ。さ。書。む。ま。い。お。い。さ。何。吟。詠。せ。れ。く。と。志
ち。ハ。先。小。吟。さ。り。あ。ぢ。や。も。孝。行。が。好。く。ね。と。云。所。不
お。ま。あ。て。居。る。ハ。思。名。園。の。孝。を。知。り。て。善。天。の。孝
所。不。求。あり。それ。孝。行。の。行。と。親。一。記。孝。名。何。る
所。不。求。於。平生。の。さ。ハ。親。の。ふ。お。背。ぬ。け。ま。や。う。孝
所。不。求。の。感。て。地。を。神。一。た。所。分。ま。れ。か。不。求。後
も。あり。牛。物。ふ。い。お。背。ぬ。け。の。さ。ハ。記。寸。に。お。ま。さ。る。孝。行。物
る。さ。り。を。記。せ。ども。孝。の。難。と。い。ふ。實。六。日。用。親。は。給
仕。の。君。あり。善。天。内。小。水。あり。あ。び。て。元。三。大。師。ハ

親系りする形どふありふらひ始りてやが。客元
におぬてられこそり合はくてもち候也。おをハす
形もその志也。年中何トぬふりて。起て着經仕舞之
せく出て候。第の側ふあり。且形西念寺縁の法
流がれり。くまの心を集りて。中流守りて。此系
流に成ませ。此屋敷の源を承の形か。つて。ら。お案
ト。あ。り。て。り。い。は。り。す。守。海。の。か。り。縁。今。親。ハ。冷
す。守。ど。ん。お。ぬ。て。ハ。お。ぬ。情。お。て。拍。子。守。と。お。さ。る。お
め。て。お。仕。り。す。成。す。せ。拍。七。是。ハ。情。が。出。る。の。お。を
こ。で。も。春。で。ち。よ。と。流。る。ま。で。お。仕。て。い。く。た。を。れ

と。親のあで。猫が青引ても。是ハ。あ。り。と。ど。かり。て。て
ま。木。さ。ら。を。撥。り。足。拍。子。踏。だ。り。す。る。ま。で。ち。と
足。拍。一。去。て。夜。も。火。の。を。と。ん。ら。て。親。仁。縁。の。お。ゆ
流。り。流。成。り。流。を。お。ら。ち。る。と。さ。り。ハ。形。と。さ。り。私
と。も。が。ぬ。際。で。い。ま。い。ら。ぬ。り。ど。ろ。が。屋。ら。さ。ぬ。振。ふ
致。一。ぬ。い。と。思。ふ。遠。い。お。ろ。う。ち。を。ふ。ら。と。流。け
十年も二十年も同一調子か。や。る。り。ハ。余。り。と。あ。ん
ぼ。う。の。結。人。で。あ。る。れ。ハ。形。り。ふ。ら。ひ。た。と。思。間。を。あ。る
ま。い。と。思。後。の。感。應。が。あ。く。と。も。た。親。の。人。ハ。孝。子。と
稱。して。度。の。二十。四。孝。乃。溝。中。ハ。入。て。も。た。る。り。あ。る。り

てはたの道へ進まふ有りともとのおちいておと
 求むる天物のごふふ軍配うちを待つがる振をお
 ちとせーが長く形るが是がたらず有合あつたて
 るを海寸を淳朴の古風とて。昔から又流るの
 菜の物や正月のれ青はふかく春時より却て
 賢素あつて云へ何なるれ。福ひの物とて古風
 を改め寸百年も又十年も古風かすぬ古風
 りてかすの子破牛房二月のりさ法記松五月の
 若物何方も落ふかさご筭九月のるる寸ひ
 かすぬ物と云傳一も秋形寸びの春うらん

芋の名月梨の良産。是で昔の賢素と云るる
 よいこふ是下くお懸のありらひいもので。福あつ
 小春前のりんかけの志つぼくのと云こもじたるハ
 一二月の礼ハ飲食ふちどまるとて大地初うけ
 始一より一日ふ之夜は、戦場でも焼系でも
 喰らひ終をあらぬ一ちりやと聖人も大宰小宰
 のりかちより 紺丸のむき振をで昔の等
 と小殿すふまわけあふ者もそのしやとてその
 厚うちかきこふまでもかられた町人百姓ハ
 芦の穂を入れて、麻の布を着るといふをこ



いと云つて云つた形らびて穂のれと云たればあそ穂
いと穂と云云と云ふが有る。芳山は穂おろしの保
綿いろく何りのと看板も亦も昔の質朴な世小
んが付くぬる遠。彩乃のかう志やおの早八夜志
のと云場へ八年お流と申して。又十年江の春丸の江
世の風ふ情もふ人の何あつてさ世と世と
が南人の夢回であつた。云々とけれどもかる結構
分時ふ遠ふて琴心かぬ出捨子も形く之弦をぬ
裏店も形く。六十余州のおはんあからの汗あ
るがしてお免してと納するは知れず細合

おやがやそれを忍れもあまげもあふ今お怒甲の
楳一枚あまめて片よ志めこ是から二朝お屋へ来て
こらん種をたたらちとら後がぬくおふと。お喰せ
ぬ主人でも持たぬいひある一食お種のはねと
角の大名乃奈の者のおふ人何るや。たると
まて身と亡す戒の書物も何あふ。お年季は公
人の身で眞理を知ぬたあうけ。主人くの春乃種
まが思ひやられておる。おまお世及びもあふ
志まいのをく引負の何り。け毒喰は血種おれ
の強怒心掛先からのおお種おの令乃おはかす

父母小交たる身軀髪膚終尔刀のさびとある悪小
たありとてするす形われををふんを髪氷い
るといけ戒われがぶらうくんと居る小づり百の二百
年ふ是袖も遠くそのう。たまきの妖君星をんを
とあらがみ髪も中々形あつて相換入道あどの奈
はさした間口持つて町人が志満すその。是をこしく小
奈の者ぶやの懐心志やのとあらが方へさらせえん
かれ。而余ハ天物をくらいてもほくその志は度らぬ
されどとて捨ても重れず仲るるでもいらく小玉来
てるさ。志山の志家の坊と白雲の相換坊とが

どうくけ病丸ハ火種分茶いそい。さらしめの為
すつてやらわいられどあれや秋葉の云天庵あど
ハ炎燃ひて有来の無う熱種志あれ火火焜。同
玉石俱焚。形と速くそ。形丸をそ。形あるも有る
その志やと速く。海が追年鉄くまくるあつて又是も
神定あやあど。木の系たが。海の小道と去出。そ
長麻坊が福下小を持去依坊と云者小中射。中。中。中
と振る。あしあみあらす。二月炎す。られあつて
笑止あふよつて今より。夷代百家丸と名を改めお
弘むべ。け茶後用の人ハ。利。益。を。く。い。ひ。た。れ

あまのこ

と用情の私情めげだそを略す。すゞ經亦曰父と
僅用を私しそを以て父母を善く庶人の孝を
といつり用を私するは福よく禍を用ひて分
辨ざるもあれは善を以てまぬ人の孝は
かけすすゞ謹身の字、畏法を以ての教あり
善用の立身經の教ありある。庶人の孝乃とあれ
とも唐めそえれば又等の孝乃とさかる聖人の
云々妙ありするも是れ經亦もさるべし。必しも町人
小僧も又經の學問はさそでけぬと云ふのでい
りや庶人の孝乃一句と知るが行要ハテさすも

そいするふ下たの長溝ちやうこう親おや友人とも在ある退居たいきであらふ。あ
は常坊じやうぼうけ幼少わらわはぬかく隠かくして書文しよぶんとかけと教おしひ
を以て居れどさゆの比中ひちちゆうのおもあらば先祖せんぞハ甲
乃ので采配さいはいでもおつゝこそ山本やまもと文内ぶんないあづも同名どうめいは
とる代しろ々々毎家まいかで出でる。先祖せんぞの名なとそ終すま幼少わらわと
名のり苗氏ななうぢの隠かくして東海とうかいの茶ちやと云いふ隠かく君子くんしは常坊じやうぼう
もあどの者ものでそそい種たねふと重おもくしと出で合あはれ。ぬは常じやう小
ハあか傳でんる茶方ちやかうあり先まづ中ちゆう一の法ほふと聖傳せいでん成徳せいとく潤じゆん
身み丸まるとそ云いふ林りん就じゆ苦く氏しの名な方かう。是こゝハ百姓ひやくしやう町人ちゆうじんの服ふくする茶
小こ阿あ守しゆの歴れき極ごく方かうハさるる山やま系けいそか小こ唐たう恥ち返へん

常小

山系

小唐恥返

魂丹中管以下の士下吏街有司の報業。勸農
固本丹と云へ農人の急病を救ふ事業。良儉順氣
教と云へ一切の女中、方血のこころを治すの薬。
形白女大子乃大和小子のこころを治すの薬。
びの市松だけのと云性もあられぬおを喰はせて。何も志
ら癡を凝と云や。ひさるひさるの良薬。そのお
謙讓保赤薬、虎山、敬家、きのお供。薬一たるとい
鴨、鵞、能、優と云書あり。名山、おきめて、人をま
す。あぶ、友人へ傳授。また、きつ、おし、く、
やううと云一ヶ社へおとす。い、く、おの、火の、く、やうら

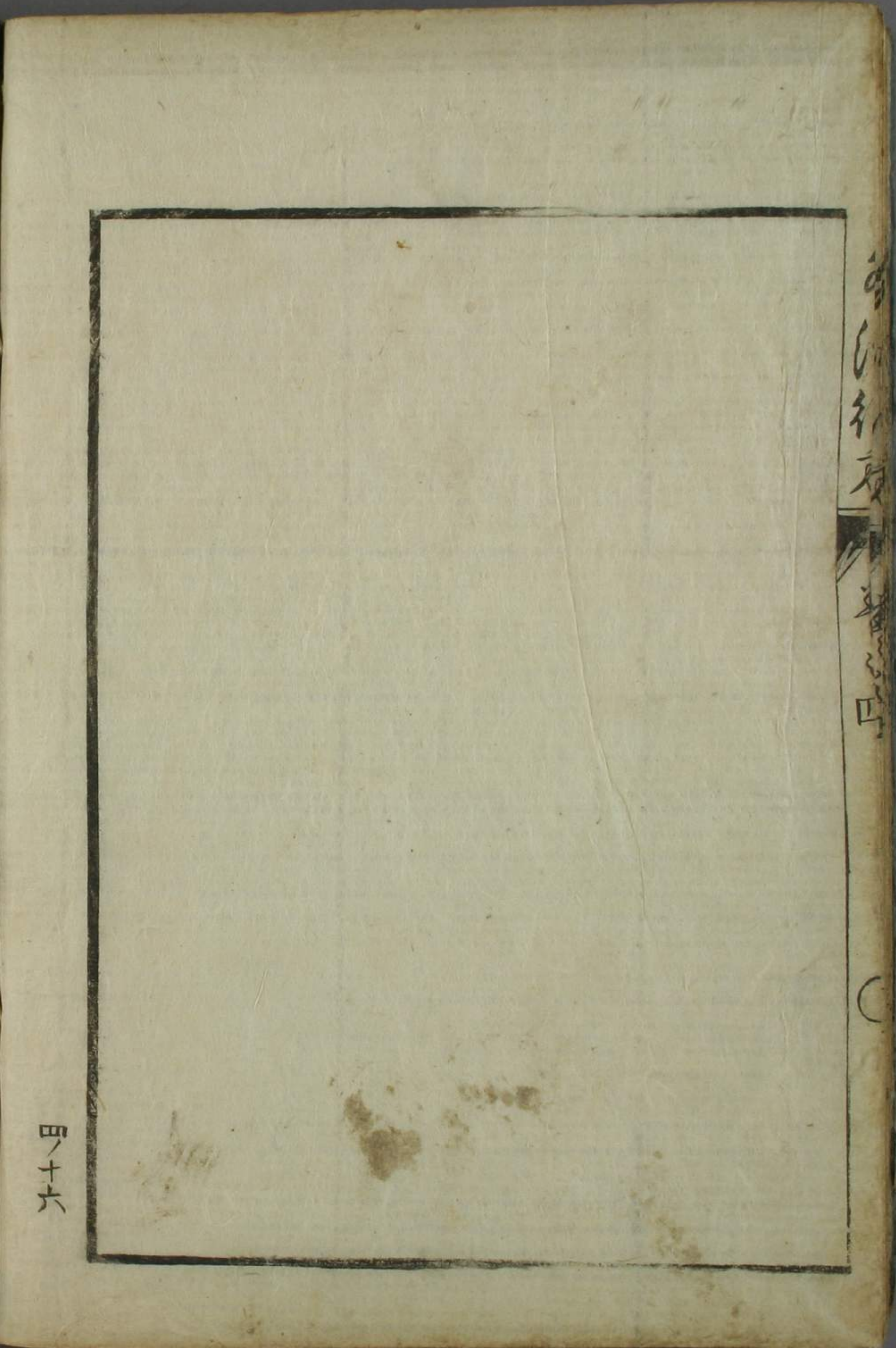
四十一

まご、ち、ま、り、く、と、候、ぐ、り、れ、い、
せ、こ、か、ら、り、に、候、り、候、
と、た、そ、の、候、お、さ、ま、む、と、云、へ、
飄、く、候、と、云、い、は、の、ア、ル、お、
あ、は、り、通、ま、り、候、

御

あ、は、り、通、ま、り、候、

あ、は、り、通、ま、り、候、



四十六

新編
四

